

## 10～14 世紀東方ユーラシアにおける古代ウイグル族ネットワークの解明

代表研究者：松井 太（大阪大学・文学研究科・准教授）<sup>1</sup>

共同研究者：白 玉冬（遼寧師範大学・歴史文化旅游学院・特聘教授）<sup>2</sup>

共同研究者：橘堂晃一（龍谷大学・仏教文化研究所・研究員）

### 1. 本研究の目的

本研究は、西暦 13～14 世紀のモンゴル帝国時代およびそれに先立つ 10～12 世紀において、トルコ系ウイグル（Uyyur > 廻紇，回鶻，畏兀兒）族が東方ユーラシア<sup>3</sup>に展開した政治的・経済的・文化的ネットワークの実態を、彼ら自身が残した古代ウイグル語資料の解読に基づきつつ解明することを目的とする。

8 世紀中葉にトルコ系ウイグル族が現在のモンゴル高原に成立させた遊牧ウイグル帝国は 9 世紀中葉に滅亡する。その後、ウイグル族は中央アジア＝天山山脈東部地方（現在の中国・新疆ウイグル自治区）に移住して西ウイグル国を建設し、いわゆる「シルクロード」上のオアシス都市定住民をも直接支配下に取り込んで、遊牧民・定住民の共存する支配体制を構築した。

その後、13 世紀初頭にモンゴル帝国が成立すると、西ウイグル国は率先してモンゴル帝国に附属した。モンゴル帝国は、自身に先立って遊牧民・定住民の双方を支配するノウハウを確立していたウイグル国人を、多く行政官僚・経済官僚・文化官僚としてリクルートした。これらのウイグル人官僚層は、文字・文書行政システム・仏教・キリスト教など、政治・文化の諸方面でモンゴル支配層を教導する役割を果たした。また、13～14 世紀を通じてモンゴル帝国がユーラシア広域にその支配圏を拡大していくのに伴い、モンゴル支配層に組み込まれたウイグル人官僚層にとどまらず、「民間」のウイグル族もその活動圏を拡大していったと考えられる。

東方ユーラシア広域における彼らウイグル族の活動の痕跡を直接に示す歴史資料としては、新疆とその東隣の甘粛省から発見され、現在は中国および世界各国（英・独・仏・露・日本）に散在する古代ウイグル語出土文献が挙げられる。20 世紀初頭以来、これらの出土文献については、歴史学・文献学・言語学・宗教学的視点から、多数の研究成果が重厚に蓄積されている。一方、近年の中

<sup>1</sup> 申請・採択時点では弘前大学人文学部教授。2015 年 4 月より現職。

<sup>2</sup> 申請・採択時点では内蒙古大学蒙古史研究所副教授。2016 年 1 月より現職。

<sup>3</sup> 本研究では、パミール高原以東のユーラシア東半部（中央アジア・北アジア・東アジア・南アジア・東南アジア）を便宜的に「東方ユーラシア」と措定しておく。

国における開発の進展に伴い、華北や華南の諸地域からも古代ウイグル語文献資料が発見されており、新疆や甘粛省の仏教石窟遺跡には、ウイグル族の仏教巡礼者の記した題記銘文資料が多数遺存している。これらの新出資料を用いて、ウイグル族の社会・経済・宗教文化とその広域ネットワークを解明することが、本研究の主要な目的である。

## 2. 本研究の意義

近年の日本の歴史研究においては、西暦 13～14 世紀のモンゴル帝国のユーラシア支配とそれに伴うヒト・モノ・文化の大規模な交流を、世界史上初の「グローバル化」として世界史上に位置づける視点が有力である。一方、東方ユーラシア各地に散在する古代ウイグル語文献資料の過半はモンゴル帝国時代に属するものであり、ウイグル族の活動はそのまま、モンゴル帝国による「グローバル化」の歴史相の具体例となる。

また、モンゴル時代のウイグル族の広域活動が、モンゴル時代以前（西暦 10～12 世紀）のそれを歴史的な前提条件としていることは当然である。モンゴル時代以前のウイグル族の広域活動の諸相にも分析を及ぼし、それがどのように後世のモンゴル支配に作用したのか、という視点を加えることで、モンゴル帝国時代の「グローバル化」の特質を理解することにつながる。

## 3. 研究の実施経過

本研究申請時点では、2015 年 1 月の研究開始時点から研究会を開催し、分担内容とそれに関わる主要な問題点・論点を整理する予定であった。しかしながら、申請・採択後、代表研究者の松井が弘前大学から大阪大学へ異動することとなり、2015 年 1～3 月には電子メールその他の手段での打ち合わせや情報交換を散発的に行なうにとどまった。ただし幸いにも、その間の連絡をもとに研究成果を公刊することはできた。また、2015 年 4 月の松井の異動後は、共同研究者との各種打ち合わせがより容易となり、緊密に情報を交換した上で研究を進めることができた。

上述のように、古代ウイグル語文献資料は、中国および世界各国（英・独・仏・露・日本）の研究機関に所蔵されており、また中国新疆・甘粛の仏教石窟遺跡に遺存する。それらの資料の全てを調査対象とすることは予算的制約（特に円安に伴う海外調査費用の高騰）から不可能であるので、本研究課題においては、新疆・甘粛省の仏教遺跡に残された題記銘文資料を主要な調査対象として設定することとした。その理由は、各国の研究機関所蔵の出土文献（紙文書）資料は、近年では World Wide Web 上での公開が進捗して閲覧が容易となっているのに対して、遺跡現地の題記銘文資料については学界への資料公開も進捗

しておらず、調査研究のためには中国現地への海外出張を絶対に必要とするからである。本研究の代表研究者・共同研究者は、2015年までの5年間、継続的に甘粛省の敦煌石窟の古代ウイグル語題記銘文資料を調査してきており<sup>4</sup>、本研究課題でもこれら古代ウイグル語題記銘文資料の現地調査に注力し、既公刊資料のテキスト修正や未発表資料についての情報提供・公開など、基礎的データの提供というレベルから学界に貢献することを第一の課題としたものである。

本研究助成による海外出張は、2015年内に2度にわたって実施し、いずれも石窟現地での題記銘文資料の解読研究を主要な目的とした。ただし、石窟での調査と併行して、現地研究機関所蔵の出土文書類の調査も可能な範囲で実施し、また国際学会・講演などで本研究課題の成果の一部を提示し、国際的な研究発信にも努めた。

その具体的な研究対象および調査日程は以下の通りである。

①2015年9月12日～9月17日：中国新疆ウイグル自治区トゥルファン(Turfan > 吐魯番)地域、ベゼクリク(Bezeklik > 柏孜克里克)・ヤールホト(Yarkhoto > 雅爾湖)・ベシュガル(Beshghar > 拜西哈爾)・センギムアギズ(Senggim-Aghiz, 勝金口)などの諸石窟の調査。参加者は松井太・橘堂晃一。なおこの際には、新疆ウイグル自治区博物館および吐魯番博物館に所蔵される古代ウイグル語文献も調査した。また松井は、この調査に引き続いて中国揚州市に移動し、当地で開催された国際学会「馬可・波羅与絲綢之路」(2015年9月18日～9月20日、主催：揚州市人民政府・揚州大学・北京大学ほか)に参加し、「蒙元時代回鶻仏教徒和景教徒的網絡」と題する研究発表において本研究課題の成果の一端を提示した。

②2015年11月28日～12月8日：中国甘粛省敦煌の仏教石窟(莫高窟・榆林窟)および内蒙古自治区呼和浩特市の「万部華嚴経塔」遺址の調査<sup>5</sup>。参加者は松井太・橘堂晃一・白玉冬(橘堂は敦煌のみ参加)。また、莫高窟敦煌研究院の要請を受け、調査期間中の2015年12月3日に、松井が「回鶻仏教徒在敦煌：敦煌諸石窟回鶻語銘文調査簡報」、橘堂が「敦煌諸石窟婆羅迷文字銘文調査簡報」と題して講演を行ない、調査成果の一端を中国側研究機関・研究者に提示した<sup>6</sup>。

#### 4. 主要な研究成果の概要

---

<sup>4</sup> その成果のごく一部は、Matsui 2008b・松井太 2013・松井太 2014 などで提示されている。

<sup>5</sup> 呼和浩特での調査(12月5日～12月8日)のための宿泊費・日当は、本研究助成金では不足したので、別財源から支弁した。

<sup>6</sup> 簡報が『敦煌石窟公共網』(<http://public.dha.ac.cn/content.aspx?id=244765189311>)に掲載されている。

以下に、本研究課題で解明し得た諸点を報告する。

#### (1) 西ウイグル国と敦煌の仏教的ネットワーク

モンゴル高原の遊牧ウイグル帝国は、8世紀中葉の成立後まもなく、ペルシア起源の二元論的宗教であったマニ教を受容した。ウイグル族の多くは、9世紀後半の帝国滅亡・東部天山地方への西遷の後も、引き続きマニ教を信仰していた。しかし、10世紀後半から11世紀初頭にかけて、西ウイグル国のウイグル族は急速に仏教へと改宗していくこととなる。

ウイグル族への仏教布教の初期段階においては、東部天山地方の原住民であった印欧系のトカラ人仏教徒が大きな影響を与えたことが、古代ウイグル語の仏教用語に対する言語学的研究や、ウイグル語仏典の歴史学的な分析によって解明されている<sup>7</sup>。一方、とりわけ10世紀以降には、ウイグル族は漢人仏教徒の強い影響を受けるようになり、漢文仏典を原典としてウイグル語に翻訳された仏典が膨大に作成されていくこととなる。その背景には、10世紀以降の西ウイグル国が、東方の敦煌王国（両者の距離は直線距離で約500km）との政治的・経済的な関係を深化させるのに伴い、敦煌で行なわれていた漢人仏教の影響が西漸して西ウイグル国のウイグル人仏教徒に影響を及ぼしたものと考えられている<sup>8</sup>。

本研究では、敦煌地域の莫高窟・榆林窟に遺存する古代ウイグル語題記銘文資料のうち、西ウイグル国から当地を訪れた仏教徒が書き残したと推定されるものに焦点をあて、西ウイグルと敦煌を結ぶ仏教巡礼ネットワークの有様を考察した。

その際に重要となる人物は、アディティヤセン（Adityasen）という1人のウイグル人仏教徒である。彼は「持戒者；律師（šilavanti）」の称号を有する仏教徒（おそらくは仏僧）であり、莫高窟の計4窟（第61窟、第197窟、第201窟、第443/444窟）・榆林窟の計4窟（第19窟、第26窟、第31窟、第36窟）に古層のウイグル字（半楷書体）によるウイグル語で自身の巡礼を記念する題記銘文を書き残している。これらの点はすでに松井が旧稿で紹介していたが<sup>9</sup>、今回の現地調査により、彼の出身地がベシュバリク（Beš-Baliq > 別失八里；北庭）であることを確認できた<sup>10</sup>。ベシュバリクは東部天山山脈北麓に位置する西ウイグル国の夏都である。また、榆林窟第31窟の題記銘文によれば、彼は「3ヶ月の安居（<sup>あんご</sup>pkčan）」のために榆林窟に滞在したという。すなわち、西ウイグ

<sup>7</sup> 庄垣内 1978; 森安 1989.

<sup>8</sup> 百濟 1983; 森安 1985; 森安 1987; Rong 2001.

<sup>9</sup> 松井 2013, pp. 39–40.

<sup>10</sup> 松井 2013, p. 40 で、彼の出身地を、高昌（Qočo）すなわち天山南麓のトゥルファン盆地に位置する西ウイグル国の冬都（現在の高昌故城はその遺址）と判読していたのは誤読であり、ここに訂正する。

ル仏僧のアディティヤセンは、仏教的修行としての安居をあえて敦煌で実践しているのである。彼の巡礼活動は、西ウイグル国のウイグル人仏教徒と仏教聖地としての敦煌との仏教文化上のネットワークの証左とみなすことができる。

さらに、このアディティヤセンは、ウイグル字以外にブラーフミー文字（梵字）による題記銘文を合計 21 窟（莫高窟計 15 窟・榆林窟計 6 窟）に書き残している。これらのブラーフミー文字題記銘文の分析は共同研究者の橋堂が主に担当し、重要な知見を得るに至ったので、その概要を報告しておく。

アディティヤセンがブラーフミー文字題記銘文を書き残した石窟の一つに、巨大な涅槃大仏像を擁することで著名な莫高窟第 148 窟がある。この窟は、盛唐期に開鑿されたものであるが、西ウイグル国が敦煌を政治的影響下に置いた 11 世紀前半頃に重修され、ウイグル王族・貴族の供養貴人像が主室や甬道に描かれた、いわゆる「沙州ウイグル窟」として学界から注目されている<sup>11</sup>。今回の調査で、主室東壁南側の供養人群の先頭に位置する比丘像と、そこに付されたブラーフミー文字題記銘文を検討することにより、この供養比丘が西ウイグル国から「金印」を与えられたトカラ仏教系の高僧であったことが判明した。これは、西ウイグル国内のトカラ人仏教徒と、漢人が中心となる敦煌仏教との文化的交流を考える上で重要となるだけでなく、トゥルファン地域のベゼクリク石窟などに描かれた西ウイグル時代のトカラ人供養比丘像の図像的分析と、その歴史的背景の検討にも資するものである<sup>12</sup>。

## (2) モンゴル時代のウイグル仏教徒のネットワークの拡大

冒頭に述べたように、モンゴル帝国時代、旧西ウイグル国人はモンゴル支配層と一体化してその活動圏を東方ユーラシア広域に拡大する。そのことは、各種の漢文編纂史料に記録されるウイグル族官僚・武将の伝記類が雄弁に物語る<sup>13</sup>。また、トゥルファン地域で発掘・収集されたウイグル語印刷仏典の多くは、モンゴル帝国に出仕したウイグル人高級官僚や高僧の支援のもと、モンゴル帝国＝元朝の首都である大都（現在の北京）や、旧南宋の首都であった杭州（臨安・行在）の印刷所において出版されたものであった<sup>14</sup>。また、敦煌から出土した元朝時代のウイグル語文書にも、元朝宮廷のウイグル人高僧がウイグル語に翻訳した仏典の授受に言及するものや<sup>15</sup>、あるいは「行在緞子（qingsay tavar）」つまり行在（＝杭州）の特産品であった緞子の交易に関係するものが含まれる<sup>16</sup>。

<sup>11</sup> 森安 2011, pp. 523–524.

<sup>12</sup> 以上の諸点の詳細については、近刊予定の橋堂 2016a を参照されたい。

<sup>13</sup> 代表的な研究として安部 1955, 陳高華 1986 を参照。

<sup>14</sup> Zieme 1981; BT XXVI.

<sup>15</sup> 森安 1983; Hamilton 1992.

<sup>16</sup> 森安 1988.

これらの資料は、モンゴル帝国支配下のウイグル仏教徒が、彼らの故地であるトゥルファン地域から、敦煌・甘肅河西さらには華北・江南に及ぶ広大なネットワークを構築し、その上で仏典や各種の商品の交易・輸送を活発に行なっていたことを示す<sup>17</sup>。

いうまでもなく、これらの交易は、人間が実際に移動することによって支えられていた。かつて筆者は、敦煌北区石窟出土のモンゴル語文書1件を検討し、この文書がトゥルファン地方を支配するチャガタイ=ハン国の代官が、「灌頂国師」の号を与えられた元朝の高僧（おそらくウイグル人仏僧）に対して交付した特許状であることを明らかにした。この特許状によって移動の安全を保証された「灌頂国師」とその弟子からなる一行は、高昌・ベシュバリクなどの東部天山の諸都市で法会を開き、その後に敦煌に戻ったものである。また、この文書が出土した莫高窟 B163 窟からは高級絹織物などの奢侈品の残片が発見されており、これは「灌頂国師」たちが各処で集めた布施・喜捨の一部と推定できる。すなわち、ウイグル仏教徒の仏教文化的・経済的ネットワークは、商業的ネットワークとも結びつきつつ、元朝・チャガタイ=ハン国というモンゴル諸政権の「境界」を越えて広がっていたと考えられる<sup>18</sup>。

本研究で対象とした、東方ユーラシア各地の仏教石窟に遺存する古代ウイグル語題記銘文資料には、(1) で言及した西ウイグル時代のアディティヤセンによる題記銘文と同様に、モンゴル時代のウイグル人仏教徒が巡礼の記念のために書き残したものが多数含まれており、仏教聖地としての石窟をめぐる巡礼ネットワークの広がりを示すものとして重要である。松井はこれまでに、モンゴル時代の敦煌石窟を中心とするウイグル人仏教徒の巡礼ネットワークが、西は東部天山地方から、東は甘肅地方・寧夏さらには山西省の仏教聖地である五臺山にまで及んでいたことを、題記銘文資料にもとづいて解明してきた<sup>19</sup>。

我々は、本研究課題における調査で、敦煌を中心の一つとするウイグル仏教徒の巡礼圏がさらに東方にまで拡大していたことを示す資料を確認できた。それは榆林窟第12窟の古代ウイグル語題記銘文である。

この銘文はすでに先行研究において写真と共に公刊されている<sup>20</sup>。その第1行で *qamu yalavač* と読まれていた語は、現地調査で再解読した結果、古代ウイグル語で「白い城市」を意味する「アクバリク (Aqbaliq ~ Aq-Baliq)」と改訂し、巡礼者たちの出身地を示すものと解釈すべきことが判明した。この「アクバリク」という地名は、マルコ=ポーロ『東方見聞録』が華北地域の都市として

<sup>17</sup> Zieme 1981; 小田 1984; Zieme / 百濟 1985, pp. 43–48; cf. 森安 1988.

<sup>18</sup> 松井 2008a.

<sup>19</sup> 松井 2013, pp. 38–44; 松井 2014, pp. 36–40.

<sup>20</sup> Hamilton / Niu 1998, inscription A.

伝える「アクバルク (Achbaluch)」あるいは「アクバレク=マンジ (Acbalec Mangi)」のいずれかに比定することができる。前者の「アクバルク」は元代の真定路(現在の河北省正定)に<sup>21</sup>, 後者の「アクバレク=マンジ」は興元路に比定されている<sup>22</sup>。我々が榆林窟題記銘文中に発見した地名「アクバリク (Aqbalıq)」を真定路・興元路のどちらに比定するかを、最終的に決定することは困難である。ただし、チンギス帝室に出仕したウイグル人官僚が少なからず真定路に赴任していたという点からみれば<sup>23</sup>, 真定路の可能性が高いかもしれない。いずれにせよ、元朝治下でウイグル族の移民集団は華北にまで進出し、西方の敦煌石窟にまで及ぶ仏教巡礼ネットワークと結びつけられていたのであろう。

ところで、敦煌の他に、中国内蒙古自治区呼和浩特市の「万部華嚴経塔」(通称「白塔」)からも、仏教巡礼者によって書き残されたウイグル語題記銘文資料が確認されている。これについては共同研究者の白玉冬が数次にわたって予備調査を行なってきたおり、本研究課題においてさらに松井と共同で解説案を検討してきたうえで、2015年12月に現地調査を行なった。その結果、この白塔には、天山山脈東端の主要都市ハミ (Qamıl > 哈密) や、ベシュバリクの西方に位置するジャムバリク (Ĉam-Balıq > 彰八里~昌八刺), さらにトゥルファン盆地の西方に位置するトクスン (Toqsın > 他古新) からウイグル人仏教徒が来訪していたことが解明された。すなわち、これらの題記銘文資料は、モンゴル時代のウイグル仏教徒の巡礼ネットワークが現在の内蒙古地域にも及んでいたことを示している。

以上、敦煌や呼和浩特に現存する古代ウイグル語題記銘文からは、東部天山地方・甘肅(敦煌, 酒泉, 張掖, 寧夏)・内蒙古(呼和浩特)・華北(五台山, 真定または漢中)を結ぶウイグル仏教徒の巡礼ネットワークを再構成することができる。本節冒頭で紹介したように、大都・杭州で刊刻されたウイグル語印刷仏典や種々の物産が、敦煌=甘肅地域から東部天山地方にまでもたらされている歴史的背景に、このような東方ユーラシア広域に広がるウイグル仏教徒の巡礼=人的移動のネットワークを想定することができるだろう。

<sup>21</sup> Pelliot 1959, pp. 8-9; 杉山 1990, pp. 15-16.

<sup>22</sup> Pelliot 1959, p. 7.

<sup>23</sup> 真定路は歴代、チンギス第4子トルイ (Tolui) 家の所領であり、トルイの次子クビライも即位以前には真定を湯休邑としていた。トルイ家に仕えたウイグル人官僚としては、シバン (Šiban > 昔班, 『元史』卷 134) やボラド=カヤ (Bolad-Qaya > 布魯海牙, 『元史』卷 121), セヴィンチ=トグリル (Sävinč-Toyril > 小雲赤脱忽隣)・八丹 (< Badam?) の父子 (『元史』卷 134) など、真定路のダルガチ (daruğaci > 達魯花赤, 代官・総督) やジャルグチ (jaryuči > 札魯花赤, 斷事官) に任じられた者もあり、また仁宗アユルバルワダ時代 (1311~1320) に礼部尚書にまで進んだウイグル人のトレク=カヤ (Töläk-Qaya > 脱烈海牙) については「祖八刺朮, 始徙真定, 仕至帥府鎮撫。富而樂施, 或貸不償, 則火其券, 人稱為長者」と伝えられる (『元史』卷 137)。

### (3) ウイグル人キリスト教徒のネットワーク

近年のトゥルファン・敦煌出土文献研究においては、東方キリスト教会<sup>24</sup>に係する資料群が注目を集めている。これらの資料ではウイグル文字のほか、東方キリスト教会の聖典文字であるシリア文字が用いられており、言語としては古代トルコ語以外にシリア語やソグド語の資料が確認されている。なかにはシリア語・トルコ語の二言語文書も含まれる<sup>25</sup>。これらのトゥルファン・敦煌出土キリスト教文献のうち、古代トルコ語で書かれたものは、おおむねトルコ系ウイグル族のキリスト教徒が書き残したものとみなされる。13世紀に東方ユーラシアを訪れたカトリック修道士のプラノ=カルピニやルブルク、さらにはマルコ=ポーロの『東方見聞録』も、旧西ウイグル国におけるキリスト教徒の存在を報告している<sup>26</sup>。

ただし周知のように、モンゴル帝国勃興直前までに、モンゴル高原とその周辺部にはケレイト (Kereid > 怯烈)、ナイマン (Naiman > 乃蛮)、オングト (Önggüd > 汪古) など、東方キリスト教を受容したトルコ系の遊牧集団が割拠していた<sup>27</sup>。その点を考慮すれば、『東方見聞録』が伝える、元朝治下の中国地域の諸処に居住する「ネストリウス派に属するトルコ系キリスト教徒」<sup>28</sup>とは、必ずしもウイグル族出身とは限られるものではない。

しかしながら、これらのトルコ系東方キリスト教徒集団は、相互に、信仰を同一にしているという自己認識を持ちつつ、社会的・経済的に協力・協調関係に

---

<sup>24</sup> 一般的にこの教派は「ネストリウス派キリスト教」と称される。それは古代・中世ヨーロッパで、カトリック側がこの対立教派を「ネストリウス派」と称したことに遡る。しかしながら、この教派の神学理論はネストリウスの創造したものではなく、むしろもっと古くからシリアのアンティオキア教会で一般的なものであったという点に鑑みれば、「ネストリウス派」という呼称は学術的には正確ではなく、近年の学界ではその使用は避けられる傾向にある。最近の英語圏での学術著作では *Christian Church of the East* という表記が定着しつつあるので、本稿でも「東方キリスト教会」という訳語を採用しておく。この点は、さしあたり Borbone 2005, p. 5, fn. 3 を参照。

<sup>25</sup> ベルリン科学アカデミー所蔵のトゥルファン地域出土東方キリスト教関係資料のうち、ソグド語資料は VOHD 18,4, シリア語資料については VOHD 5,3 によりカタログ化されている。また、トゥルファン・敦煌等の古代ウイグル語東方キリスト教文献は、ごく最近、Zieme 2015 による校訂テキスト集成が刊行された。

<sup>26</sup> 護 1965, pp. 26, 204.

<sup>27</sup> 江上 2000; Borbone 2005; 中村 2008; Tang 2011.

<sup>28</sup> トルコ系東方キリスト教徒が居住する都市として、『東方見聞録』は以下のような都市に言及する：カシュガル (Kāšyar), ヤルカンド (Yarkand), 敦煌 (沙州 > Saciou), ウイグル国 (イウグリスタン Iuguristan < Pers. Ūyğuristān), ギンギンタラス地方 (Ghinghin talas, 現在地不明), 肅州 (> Succiu), 甘州 (Campçio), 西涼 (Ergiuul < Mong. Eri-je'ü), 西寧州 (Silingiu), 寧夏 (Mong. Eri-Qaya > Egrigaiia), 天德 (Tenduc), 西安 (京兆府 > Quengianfu), 漢中 (Cuncun), 昆明 (ヤチ Iachi < 雅積), 鎮江府 (Cinghianfu), 杭州 (キンサイ Quinsai < 行在)。愛宕 1970, 高田 2013 の関係箇所を参照。



あったと推測される。その最も顕著な例は、大都からバグダードの東方教会大主教座への巡礼に向かおうとする「ウイグル人」キリスト教徒マルコス (Markus) とラッバン=サウマ (Rabban Sauma) に対して、内蒙古に拠点を置くオングト王家が多大の支援を提供していることである<sup>29</sup>。

最近、牛汝極教授と、国立オーストラリア大学の研究グループは、互いに独立して、泉州地域に遺存するシリア文字・ウイグル文字の東方キリスト教徒墓誌銘の校訂資料集を刊行した。それらの墓誌銘のうち、西暦 1301 年(大徳 5 年)のシリア文字トルコ語による墓誌銘 (B17 = Z25) の主人公は、「高昌城出身 (qočo baliq-liy) のトゥグミシュ=アタ=エル (tuymiš ata är)」の息子であるから、トゥルファン地域のウイグル族に属していたことが判明する<sup>30</sup>。これまで、東部天山地方・トゥルファン地域から泉州に移住してきた「ウイグル人」キリスト教徒の存在を示す墓誌銘は、この一例のみであった。しかし本研究課題における分析の過程で、1331 年(至順 2 年)のウイグル文字トルコ語墓誌銘 (B23 = Z6r) もまた、「ウイグル人」キリスト教徒のものであったことが判明した。従来の研究は第 1 行冒頭を qup-luy と解釈しているが<sup>31</sup>、これは明らかに qočo-luy 「高昌出身者」と訂正して、墓主の女性の夫の出身地を示すものとみるべきである。

これらの墓誌銘 2 件によって、泉州にまで移住・進出した「高昌出身」のウイグル人東方キリスト教徒の存在が、決して珍しいものではなかったと考えてよいであろう。その歴史的背景には、ウイグル人東方キリスト教徒も、ウイグル人仏教徒と同様に、モンゴル帝国の拡大に伴ってその活動圏を東方中国地域へ拡張したという事情を推定することができる。

そして、これらのウイグル人東方キリスト教徒は、ウイグル人仏教徒と協力して、活動圏を拡大していった可能性が高い。少なくとも、彼らは、相互に重複する交通・交易・宗教巡礼の経路を使用していたと考えられる。そのことは、前節で検討した内蒙古自治区呼和浩特市の「万部華嚴経塔 (白塔)」の題記銘文からも知られる。

この寺塔には、セルギス (Särgiz) という名の神父 (qašiša) が残した題記銘文をはじめ、複数のシリア文字トルコ語題記銘文が発見されている<sup>32</sup>。さらに、本研究課題での現地調査により、ピリポス (pilipos < Syr. pilippōs), ヨシムト (yošimut < Sogd. 'yw-šmbd), キラキズ (qīraqiz? < Sogd. qwryqws < Syr. qûryâqûs) といったキリスト教人名を持つ巡礼者が、ウイグル字トルコ語とシ

<sup>29</sup> Borbone 2005, p. 12.

<sup>30</sup> 牛汝極 2008, pp. 241–244; Franzmann / Lieu 2012, pp. 179–183.

<sup>31</sup> Hamilton / Niu 1994, pp. 156–163; 牛汝極 2008, pp. 156–158; Eccles / Lieu 2012, pp. 131–133.

<sup>32</sup> Borbone 2008; Borbone 2013.

リア文字シリア語で書き残した銘文を見出すことができた。すなわち、仏教寺院としての万部華嚴経塔には、仏教徒の巡礼者と並んで、トルコ系キリスト教徒もまた頻繁に参詣していたことが、これらのウイグル文字・シリア文字トルコ語題記銘文によって明らかとなるのである。

さらに我々は、榆林窟第 16 窟にも、シリア文字トルコ語銘文が記されていることを発見した。その全文解読にはなお時間を要するが、現時点での部分的解読からは、「申年五月十五日」に、「瓜州出身 (x'sw-lwk < qaču-luy)」の某人が「山寺 (t'k pwx'r < tay buqar)」即ち榆林窟に「2 日間 ('ky kwyn = iki kün)」滞在して「1 頭の羊 (pyr xwyn < bir qoyn)」を寄進した、ことを記念する題記銘文と考えられる。この題記銘文の筆者は、敦煌東隣の瓜州路の出身であること、またウイグル仏教徒と同じく榆林窟を「山寺」と称している<sup>33</sup>ことなどから、ウイグル族に属するものとみられる。

以上の題記銘文の存在から、ウイグル人を含むトルコ系東方キリスト教徒のネットワークは、モンゴル時代には、東部天山地方から甘粛・内蒙古さらには泉州にまで及んでいたこと、そしてそのネットワークはウイグル人仏教徒のそれとほぼ重複していたと結論できる。榆林窟や莫高窟の石窟寺院、あるいは万部華嚴経塔などの寺院は、仏教信仰の拠点であると同時に、仏教・キリスト教巡礼者の移動・交通を支えるインフラストラクチュアとしても機能していたと考えられる。

マルコ=ポーロ『東方見聞録』は、「ウイグル国 (Iuguristan < Pers. Uygūristān)」の東方キリスト教徒について「しばしば偶像教徒と通婚する」と伝えている<sup>34</sup>。トゥルファン地域出土のウイグル語世俗文書にも、仏教徒とキリスト教徒が同一文書のなかで言及される例があり<sup>35</sup>、それらは仏教徒とキリスト教徒が日常的に接触していたことを示す点で、『東方見聞録』の記述を裏付ける。さらにモンゴル時代以前の西ウイグル時代 (10 世紀から 11 世紀初頭) においては、マニ教

<sup>33</sup> Cf. 松井 2014, p. 33.

<sup>34</sup> Moule / Pelliot 1938, 156 頁。

<sup>35</sup> 例えば、トゥルファン出土のウイグル文棉布消費貸借契 (SUK Lo 15) では、貸主はヴァプトゥ (Vaptu < 法奴)」という仏教徒名、借主はキルヤクズ (Qīryaquz < Sogd. qwryqws < Syr. qūryāqūs) というキリスト教徒名を有する。また、別のウイグル文消費貸借契 (SUK Lo23) では、貸主はカイクトゥ (Qayimtu < 華嚴奴) という仏教徒名、借主はペトロス (Pādroz < Syr. Petros) というキリスト教徒名を有する。人名リストの断簡 Ch/U 6321v では「都統 (tutung ~ tu)」の称号をもつ仏教徒と同時に、デンハ (Dīnxa < Syr. Denhā)、ゲオルギス (Kōvārgis < Syr. Gīwargīs)、セルギス (Sārgis < Syr. Sargīs)、サウマ (Savma < Syr. Saumā) といったキリスト教徒人名も言及される。また別の人名リストの断簡 U 5623 も、アルスラン阿闍梨 (Arslan ačari) と同時に、キリスト教徒人名マール=シリムン (Mar Šilimon < Syr. Šlīmūn)、ネストリウス (Nistiris < Syr. Nestūriōs) が同時に言及される。松井太 2002, 文書 H, J; Zieme 2015, p. 179ff. 参照。

徒と仏教徒が商業活動において協力しており、さらには同一の寺院のなかで共存する例も確認されている<sup>36</sup>。

このような、多宗教が混在・共存するウイグル人社会の特性が、モンゴル時代におけるウイグル人仏教徒・キリスト教徒の活動圏の拡大を促進したと考え、てよいであろう。

## 5. 結語

トゥルファン地域・敦煌地域から出土した古代ウイグル語文献は、今や、その大多数が何らかの形で研究者に開放されている。これらの出土文献の分析に基づく多くの研究により、モンゴル時代のウイグル族が東部天山地方から甘粛～華北～江南にまで活動圏を拡大したことが明らかにされてきた。

その基礎に立って、本研究課題では、なお学界に十分紹介されていない敦煌や内蒙古の諸遺跡に遺存する古代ウイグル語題記銘文資料の現地調査に注力した。その結果、それらの新発見資料を主な材料として、ウイグル族が宗教的な巡礼・移動のネットワークを拡大していった状況の一端を解明できた。特に、モンゴル帝国時代におけるウイグル族の宗教巡礼ネットワークの拡大に際して、仏教徒と東方キリスト教徒とが共存・協力関係にあったという、従来は十分に認識されていなかった視点を提供できたと考える。

## 6. 研究成果の公表

本報告書に述べられた内容の多くは、近日中に学術論文その他の形で公刊される予定である。

既述のように、上記 4(1)の一部は、橘堂 2016a により公表される。また 4(2)・4(3)については、松井がすでに中国語論文（松井 2016）を投稿しており、また英文での公表をも予定している。

トゥルファン地域の仏教石窟遺跡の古代ウイグル語題記銘文資料については、十全の調査を行なうための環境が整っておらず、なお校訂テキストデータを確定しづらい状況である。今後も、現地研究者との協力を進め、研究成果の刊行に結びつけたい。

敦煌石窟の古代ウイグル語題記銘文資料については、本研究助成以前から収集していたデータとあわせた校訂テキスト資料集成を準備しており、2017年3月を目処に刊行予定である。

呼和浩特の万部華嚴経塔のウイグル人仏教徒・東方キリスト教徒による題記銘文については、松井・白が協力して解説結果の論文化を進めている。

以上のような現地調査の成果の他にも、代表研究者・共同研究者は本研究課

---

<sup>36</sup> Matsui 2012, pp. 121–123; Matsui (forthcoming).

題を通じて種々の情報交換・協力を行なってきた。それらに基づく成果として、松井 2015・橘堂 2016b を挙げることができる。いずれも、モンゴル帝国第4代皇帝モンケの時代に作成されたウイグル語文献を扱い、モンゴル帝国の支配システムや政治・文化的状況を解明したものである。

また松井は、新疆吐魯番博物館において調査したトゥルファン地域出土ウイグル語文書について、現地の研究者との共同論文を準備し、英文で投稿している (Li / Matsui 2016)。

## 7. 参考文献

- 安部 健夫 1955: 『西ウイグル国史の研究』 彙文堂書店。
- Borbone, Pier George 2005: Some Aspects of Turco-Mongol Christianity in the Light of Literary and Epigraphic Syriac Sources. *Journal of Assyrian Academic Studies* 19-2, pp. 5–20.
- Borbone, Pier Giorgio 2008: Syroturcica 2: The Priest Särgis in the White Pagoda. *Monumenta Serica* 56, pp. 487–503.
- Borbone, Pier Giorgio 2013: More on the Priest Särgis in the White Pagoda. In: L. Tang / D. W. Winkler (eds.), *From the Oxus River to the Chinese Shores*, Berlin / Münster / Wien / Zürich / London, pp. 51–65.
- BT XXVI = Yukiyo Kasai, *Die uigurischen buddhistischen Kolophone (Berliner Turfantexte XXVI)*. Turnhout, 2008.
- Eccles, Lance / Lieu, Samuel N. C. 2012: Inscriptions in Latin, Chinese, Uighur and Phagspa. In: Samuel N. C. Lieu et al. (eds), *Medieval Christian and Manichaean Remains from Quanzhou (Zayton)*, Turnhout, pp. 129–149.
- 江上 波夫 2000: 『モンゴル帝国とキリスト教』 サンパウロ。
- 陳 高華 1986: 『元代維吾爾哈刺魯資料輯録』 新疆人民出版社。
- Hamilton, James 1992: Étude nouvelle de la lettre Pelliot Ouïgour 16 Bis d'un bouddhiste d'époque mongole. In: A. Cadonna (ed.), *Turfan and Tun-huang: The Texts*, Firenze, pp. 97–121, +5 pls.
- Hamilton, James / Niu Ruji 1994: Deux inscriptions funéraires turques nestoriennes de la Chine orientale. *Journal Asiatique* 282, pp. 147–164.
- Hamilton, James / Niu Ruji 1998: Inscriptions ouïgoures des grottes bouddhiques de Yulin. *Journal Asiatique* 286, pp. 127–210.
- 橘堂 晃一 2016a: 「ベゼクリク石窟供養比丘図再考：敦煌莫高窟の銘文を手がかりとして」 宮治昭 (編) 『アジア仏教美術論集・第3巻：中央アジア』 中央公論美術出版, 印刷中。

- 橋堂 晃一 2016b: 「ウイグル語訳「華嚴経」研究の新展開：奥書と訳出の背景を中心に」『東洋史苑』 86/87, 印刷中。
- 百済 康義 1983: 「妙法蓮華経玄賛のウイグル訳断片」護雅夫（編）『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社, pp.185–207.
- Li Gang / Matsui Dai 2016: An Old Uighur Receipt Document Newly Discovered in the Turfan Museum. *Written Monuments of the Orient* 2016, in print.
- 松井 太 2002: 「モンゴル時代ウイグルistanの税役制度と徴税システム」松田孝一（編）『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』科学研究費報告書(No. 12410096), pp. 87–127.
- 松井 太 2008a: 「東西チャガタイ系諸王家とウイグル人チベット仏教徒」『内陸アジア史研究』 23, pp. 25–48.
- Matsui Dai 2008b: Revising the Uigur Inscriptions of the Yulin Caves. *Studies on the Inner Asian Languages* 23, pp. 17–33.
- Matsui Dai 松井 太 2012. A Sogdian–Uigur Bilingual Fragment from the Arat Collection. 吐魯番学研究院（編）『語言背後の歴史：西域古典語言学高峰論壇論文集』上海古籍出版社, 115–127.
- 松井 太 2013: 「敦煌諸石窟のウイグル語題記銘文に関する筭記」『人文社会論叢』人文科学篇 30, 弘前大学人文学部, pp. 29–50.
- 松井 太 2014: 「敦煌諸石窟のウイグル語題記銘文に関する筭記（二）」『人文社会論叢』人文科学篇 32, pp. 27–44.
- 松井 太 2015: 「古ウイグル語行政命令文書に「みえない」ヤルリグ」『人文社会論叢』人文科学篇 33, pp. 55–81.
- 松井 太 2016: (白玉冬：訳) 「蒙元時代回鶻仏教徒和景教徒的ネットワーク」『“馬可・波羅与絲綢之路”国際学術研究会論文集』印刷中。
- Matsui Dai (forthcoming): Old Uigur Account Book for Manichaean and Buddhist Monasteries from Temple a in Qočo. In: D. Durkin-Meisterernst (ed.), *Memorial Volume for Prof. Dr. Werner Sundermann*, Wiesbaden, in print.
- 護 雅夫 1965: (訳) カルピニ・ルブルク『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社。
- 森安孝夫 1983: 「元代ウイグル仏教徒の一書簡」護雅夫（編）『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社, pp. 209–231.
- 森安 孝夫 1985: 「チベット文字で書かれたウイグル文仏教教理問答 (P. t. 1292) の研究」『大阪大学文学部紀要』 25, pp. 1–85, +1 pl.
- 森安 孝夫 1987: 「敦煌と西ウイグル王国」『東方学』 74, pp. 58–74.
- 森安 孝夫 1988: 「敦煌出土元代ウイグル文書中のキンサイ緞子」『榎博士頌壽

- 記念東洋史論叢』汲古書院， pp. 417–441.
- 森安 孝夫 1989: 「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」『史学雑誌』98-4, pp. 1–3.
- 森安 孝夫 2011: 「2006 年度内モンゴル 寧夏 陝西 甘肅調査行動記録」森安孝夫（編）『ソグドからウイグルへ』汲古書院， pp. 474–531.
- Moule, Arthur Christopher / Pelliot, Paul 1938: *Marco Polo, the Description of the World*, Vol. I. London.
- 中村 淳 2008: 「2 通のモンケ聖旨から：カラコルムにおける宗教の様態」『内陸アジア言語の研究』23, pp. 55–92.
- 牛 汝極 2008: 『十字蓮花』上海古籍出版社。
- 小田 壽典 1984: 「1330 年の雲南遠征余談」『内陸アジア史研究』1, pp. 11–24.
- 愛宕 松男 1970: (訳注) マルコ・ポーロ『東方見聞録1』平凡社。
- Pelliot, Paul 1959: *Notes on Marco Polo*, Vol. I. Paris.
- Rong Xinjiang 2001: The Relationship of Dunhuang with the Uighur Kingdom in Turfan in the Tenth Century. In: L. Bazin / P. Zieme (eds.), *De Dunhuang à Istanbul: Hommage à James Russell Hamilton*, Turnhout (Belgium), pp. 275–298.
- 庄垣内 正弘 1978: 「「古代ウイグル語」におけるインド来源借用語彙の導入経路について」『アジア・アフリカ言語文化研究』15, pp. 79–110.
- 杉山 正明 1990: 「蒙漢合璧命令文の研究（一）」『内陸アジア言語の研究』5, pp. 1–31.
- 高田 英樹 2013: (訳) マルコ=ポーロ・ルスティケッロ=ダ=ピサ『世界の記：「東方見聞録」対校訳』名古屋大学出版会。
- Tang, Li 2011: *East Syriac Christianity in Mongol-Yuan China*. Wiesbaden.
- VOHD 5,3 = Erica C. D. Hunter / Mark Dickens, *Syriac Texts from the Berlin Turfan Collection (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland V,5)*. Stuttgart, 2014.
- VOHD 18,4 = Nicholas Sims-Williams, *Iranian Manuscripts in Syriac Script in the Berlin Turfan Collection (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland XVIII,4)*. Stuttgart, 2012.
- Zieme, Peter 1981: Bemerkungen zur Datierung uigurischer Blockdrucke. *Journal Asiatique* 269, pp. 385–399.
- Zieme, Peter 2015: *Altugurische Texte der Kirche des Ostens aus Zentralasien*. Piscataway.
- Zieme, Peter / 百濟 康義 (Kudara Kōgi) 1985.: 『ウイグル語の觀無量壽經』永田文昌堂。

## 8. 謝辞

何よりもまず、本研究課題を 2014 年度「アジア歴史研究助成」に採択下さるとともに、研究遂行にあたり格別のご高配を賜った公益財団法人 JEF 21 世紀財団に、深甚の謝意を表したい。

また、我々の現地調査に多大の協力を賜った関係諸機関、特に中国新疆吐魯番学研究院・莫高窟敦煌研究院・内蒙古呼和浩特白塔博物館の関係各位に対して、この場を借りてお礼を申し上げます。